真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

いよいよ年祭活動始動の旬

教えの実践「動く一年」に

立教百八十六年の新春
明けましておめでとうございます

大教会長　井筒梅夫

昨年の秋季大祭にて真柱様より「諭達第四号」のご発布を頂き、年が改まり、いよいよ年祭活動始動の旬を迎えました。諭達の中で、教祖の親心にお応えするために、仕切って成人の歩みを進めることが教祖の年祭を勤める意義であり、これからの三年千日は、ひながたを目標（めどう）に教えを実践することと、たすけ一条の歩みを活発に推進する旬であると、はっきりとお示しいただきました。この真柱様のお心を汲み取らせていただいて、諭達に込められた親の思いに心を一つに結んで、教祖百四十年祭への歩みを勇んで進ませていただきたいと思います。

そこで今年は、「動く」ということを意識して、年祭活動の一年目を踏み出したいのです。これまでのほぼ三年間、世界中の人々はコロナ禍の影響でさまざまな場面での規制や制限を経験してきましたが、お互いも信仰活動に自主規制をかけざるを得なかった場面が多多ありました。しかし、この度の諭達のご発布と年祭活動の始動は、これまでの状況から一歩踏み出して、教えの実践に勇んで動き出す絶好の時旬だと思います。お道の信仰は、おぢばに繋（つな）がり教会に運ぶ信仰です。おぢば帰りと教会参拝に努めましょう。また周囲に信仰の喜びを伝え、身近なところでひのきしんに励みましょう。

まずは今年一年を心明るく勇んで動かせていただきましょう。

謹賀新年

立教百八十六年　元旦

芦津大教会

立教百八十六年の新春を迎え おめでとうございます

井筒ふみ子

新年を迎え、愈々教祖百四十年祭活動の年が明けました。

昨年秋季大祭で、真柱様から年祭に向かう諭達を頂きました。私たちはその親のお心を受けて、年祭に向かう目標を定め踏み出す時でございます。

私の掲げた目標は、お恥ずかしいながら布教師でございます。言葉だけを聞くと堅苦しく肩を張った響きですが、実は、小学生の時、先生から一人ひとりに「大人になったら何になりますか」と質問されて、戦時中ですから、兵隊、飛行兵、看護婦さんなど答えた人は多かったのですが、私は布教師と勢いよく答えました。先生も友達も私は教会の子供であることは分かっていましたが、先生は黒板に布教師と書いて「布教師は何をするのですか」と聞かれて「おたすけをします、おさづけをします」と、答えました。母の姿を見ていて、大人になった自分を重ねたのだと思います。

今年88歳を迎える私は、これから先の目標をと思案した時、幼い日に誓った布教師として、教祖の道具衆として通り切ろうと心に定めたのでございます。

真柱様は諭達の中で、「よぼく一人ひとりが教祖の道具衆としての自覚を高め、仕切って成人の歩みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である」とお仕込みいただいております。

昨秋、カザフスタン大使館から電話が入りました。カザフから国費留学生として京都大学大学院で学んでいた彼でした。「カザフの公使に赴任して東京の大使館に来ました。お母さんの所へ行きたい」との事で、大教会の秋季大祭に親子４人で帰ってきました。彼はようぼくで直轄祭も勤めていましたが、20年ぶりのおつとめ、大教会長の講話に感激したのが私には無上の喜びです。やがて大使として勤める人材です。これから、諸外国との外交にこの教えを活かしてくれる事なども話し合いました。

その数日後、韓国の女子留学生から「韓国から従妹が来たので、おばあちゃんのところへ連れて行っても良いですか」との連絡が入って２人で来ました。彼女のお母さんは修養科を修了したようぼくです。やがて２人もようぼくになることでしょう。

さて、一布教師として明るくにをいがけにおたすけに丹精する中で、高齢に伴って、若い時のように何処へでも飛び出すことは適いませんが、御存命の教祖にお凭れし念じて通っておりますと、蒔いた一粒の種を土台として、向こうから、海外からもおぢばを慕い、時には願い事を抱えて帰ってくる方たちを迎え、御存命の教祖がお繋ぎ下さっていると感じ入って、喜びと新しい勇気が湧いてきます。

そして、帰ってきて下さった方々に、子供たちや孫たちが温かく迎えて喜ばせ、心を通わせている姿を見て、親から子、子から孫へとたすけ一条の道が続いていくのを有り難く思います。

この一年も、教祖の道具衆としてお使いいただきたいと念じております。さあ皆様、手を取り合って通らせていただきましょう。

おたすけ実動に励む3年に

門司分教会長
望月慶太

教会長の理のお許しを戴いて1年が経ち、右も左も分からないまま、いろいろな方に支えられて務めさせていただきました。

私事ですが、子供も生まれ、青年会芦津分会では副委員長、福岡教区青年会では委員をさせていただくこととなり、個人的には目まぐるしく状況が変わり、責任も増した年でした。

教祖百三十年祭の三年千日は、丸々おぢばでの伏せ込みで、今の私の信仰を形作った大切な年祭活動ではありましたが、主体的に取り組んだ年祭活動という感覚ではありませんでした。

それ以前は学生でしたので、今回が初めて自分の意志で心定めをして通る年祭活動となります。教会長どころか、一信仰者としてもまだまだ未熟で、日々の生活がようやく安定してきた頃ですが、年祭活動の3年間を目前に、「どうやって教祖にお喜びいただこうか」と期待と不安の入り混じった気持ちです。

「諭達第四号」に「ひながたを目標に教えを実践し、たすけ一条の歩みを活発に推し進めるときである」とお示しくだされているように、ひながたに親しみ、おたすけの実動に励む3年間にしたいと思います。

道の先人たちが、年祭活動をたすけの旬、たすかりの旬として多くのものを残してくださったように、私も精いっぱいお道の御用の上に勤め、関わる人たちに何か一つでもお道の素晴らしさを感じていただけるような、年祭活動スタートの年にしたいと思います。

年祭の日を笑顔で迎えたい

大朝分教会長
惠　善哉

教祖百四十年祭に向けての三年千日、この旬に対して果たして今の自分にいったい何ができるだろう、またどのように進むべきなのだろう、その先にどのような姿をお見せいただくのだろうと、そう考えない日はありません。

私の教会は昭和50年に事情教会の復興から設立され、教会としての活動が始まりました。

私は祖父や父が積み重ねてきた線路の上に立ち、今教祖の年祭に向けて動き出そうとしています。

この道は代を重ねるごとに理が深くなるとお聞かせいただきますが、自身の信仰を考えると、初代のような熱い思いになるのはすごく難しい、というのが正直なところです。しかし、そんな中でも親神様は、私に初代とは違う形、違う見方で教えてくださいました。

私が教会長になる際の講習会では、いろいろな先生方からお話を聞かせていただきました。その中で、ある教会長さんから「最初は教会を出たいぐらい会長になりたくなかった」との言葉を聞いた時、自分も同じように「会長になるのは嫌だな」と思っていたので、その方のお話を熱心に聞き入り、その中で少しずつ私の心に光を当ててくださいました。「会長になる理」は、誰もが戴ける理ではない、とお聞かせいただきます。その有り難い理を戴いていると思うと、この道を真剣に通らなければならないと強く思います。

三年千日の通り方を考える中、青年会総会での青年会長様のお話

に「問いと対話と気づき」のお話がありました。まさに今、私に必要な言葉だと思います。

今の自分を見つめ直し、「伝わる人」になれるよう、思いを身近な家族友人、またさまざまな場所で伝え、共感し合いたいと思います。そして、教祖年祭のその時には、教会に繋がる多くの人々と共におぢばへ帰らせていただき、年祭のその日を笑顔いっぱいに陽気に迎えたいと思います。

陽気に御恩報じの道を

南國分教会長夫人
川畑智美

私は、10年前に夫婦で教会に入らせていただきました。にをいがけやおたすけに励む中、お道から離れた方々に、連絡や丹精をさせていただきますが、なかなか全ての方がお道へ繋がっていただけないのが現状です。

そんな中、信者さんにおさづけを取り次がせていただくと、鮮やかに神様のお働きをお見せいただくことがあり、先人先輩方や親々のおかげだと感じます。

教会としては、地域や社会に貢献をさせていただきたいと思い、5年前から里親登録をし、現在6年生の里子を預かっています。その兄弟が教会に来てくれたとき、その里子が神殿で「神様が守ってくれているよ、徳を積まないとね」と伝えてくれます。これも一つのにをいがけだと思います。

また、以前預かっていた里子は、困ったときには教会を頼ってくれ、ひのきしんやお供えをしてくれたりと、こちらが嬉しくなり心勇んできます。人だすけをさせていただいている中で、信者さんや里子たち、またたくさんの方に自分が助けてもらっているのだと感じ、とても有り難いです。

この三年千日は、教会に繋がる者が一手一つになり、陽気に御恩報じの道を歩ませていただけたらなと思います。

日々の暮らしの中で実行を

芦姫分教会
北村はぎ乃

昨年は「第30回女子青年大会」が開催され、私はこの大会を吉祥に芦津女子青年の委員長を拝命しました。

ドキドキしながらも皆さんと一緒に楽しく境内地ひのきしんや詰所での行事、そしてメインの式典に参加させていただきました。「諭達第四号」ご発布直後の大会でしたので、全国から集まった女子青年の方々の熱量をすごく感じさせていただきました。芦津からも多くの方にご参加いただき、本当にありがとうございました。

女子青年活動のかどめは、

・教会へ参拝しましょう
・にをいがけをしましょう
・ひのきしんをしましょう

の３つです。

日々生活をしている中で、これらを意識することは簡単でも、実際に行動に移すことは難しいと感じる人も多くいるかと思います。

私もその一人です。でも一人だとなかなかできない、勇気が出ないという人も、これからの女子青年活動を通して少しでも前向きになれるよう、そのきっかけを一緒につくっていけたらと思います。

私自身、教会で生まれ育ちながらもできないことだらけですが、保育士という立場を生かして、兄弟姉妹と同じような感覚で接している同居の6人の里子や、勤めている保育園の子供との日々の暮らしの中で実行に移していきたいと思っています。

頼りない委員長ですが、皆さんにご協力いただきながら、教祖百四十年祭に向かって頑張りたいと思います。

《11月月次祭　挨拶》

諭達にこもる 真柱様のお心を拝して

大教会長　井筒梅夫

皆様方には、日々は時旬の御用にご丹精いただき、心の成人にお励みくださいまして、誠にご苦労様でございます。今日はこうして大教会へお参りくださって、共々に11月の月次祭を心勇んで勤めさせていただきましたことは、大変有り難い次第です。

10月26日の秋季大祭で真柱様から「諭達第四号」をご発布いただきました。この諭達を拝して心に思いましたことを少しお話しして、今月の月次祭の挨拶とさせていただきます。

大祭当日は真柱様がご自身のお言葉で諭達をお出しくださいました。もちろんご体調のこともあり、事前に広報されていませんでしたので、参拝者にとっては思わぬ出来事であり、数年ぶりにお声を聞かせていただいて、あちらこちらからすすり泣く声が聞かれたようです。

この諭達を拝読して感じたのは、なんと分かりやすい内容であり、ようぼくの心にすっと入るお言葉だなと思いました。今回の諭達は、「御存命でお働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂きたい」というお言葉で締めくくられています。全教ようぼくに、優しい言葉で語りかけてくださっているように感じます。

真柱様からは、これまでに3度、諭達を頂いています。

諭達第一号は、今から24年前の立教161年10月25日、真柱継承奉告祭でご発布くださいましたが、その締めくくりの文章は「ここに全教一手一つの奮起と実動を要望し、御存命の教祖のお導きを願い奉る」というものでした。20年前の教祖百二十年祭を目指しての第二号では「全教が勇んで立ちあがり、一手一つに勤め切ることを切望する」という文章であり、10年前の第三号には「教祖の道具衆たるよふぼくお互いが、その使命を自覚し、任務（つとめ）に邁進して、御存命の教祖にお喜び頂きたいと願ってやまない」とあります。いずれも勇ましくも、どちらかといえば硬い文章で締めくくられていました。しかしこの度の第四号は、ようぼく一人ひとりに呼びかけ、語りかけてくださるかのように「御存命でお働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂きたい」という文章で締めくくられています。

この文章に、諭達第四号にこもる真柱様のお心が集約されているように思うのです。全体を通しても大変分かりやすい内容であることに皆さんも気付かれたと思います。教祖の年祭を勤める意義も、三年千日と仕切る意味合いについても、簡素な文章の中に最も大切な要点を記してくださっています。私たちが三年千日と仕切って目標とするひながたの道については、「水を飲めば水の味がする」「ふしから芽が出る」「人救けたら我が身救かる」との教祖の3つのお言葉が引用されています。

「水を飲めば水の味がする」というお言葉は、日々に頂戴する親神様への報恩感謝の心で、御恩報じに通ることの大切さを思案させていただくお言葉であります。また「ふしから芽が出る」とは、私たちがお道を通る道中は、楽しいことや嬉しいことばかりでな

く、辛く悩ましい出来事にも遭遇します。そんな中でも、心の持ち方と通り方次第で、ふしから芽が出る御守護を下さるという、大きな親心と頼もしい御守護を感じることができます。さらに、「人救けたら我が身救かる」。おたすけに真実を尽くす中に、我が身もたすけていただける。これが絶対的な天理であって、真にたすかる順序を教えていただくお言葉です。

三年千日と仕切って、ひながたを目標に成人の道を歩むお互いにとって、この３つの教祖の教えは大切な角目になるように思います。

そして私たちようぼくの旬の歩み方と、信仰の継承についてお述べくださっています。これはようぼくならば当然の通り方ですが、その一方で、なかなか実行できていない現実があります。これをようぼく一人ひとりが素直に、そして真剣に実行実践すれば、陽気ぐらしへの歩みは一段と前に進んでいくに違いないと思います。

私は現在、いくつかの大教会へ本部巡教に出向しておりますが、講話の原稿作成にあたって心掛けたことの一つは、「分かりやすい諭達を、難しく話さない」ことでした。この諭達の文章は私たちの心にすっと入ってくる内容だと感じています。

諭達第四号を頂戴した今、ここにこもる真柱様のお心をしっかりと汲み取らせていただいて、御存命の教祖にご安心いただき、お喜びいただけるように、三年千日と仕切って教祖のひながたを目標に教えを実践して、たすけ一条と一手一つの心勇んだ実動を誓って、教祖百四十年祭を目指す年祭活動へ向かわせていただきたいと存じます。

（要約）

立教百八十五年　十一月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の果てしなき親心のまに〳〵、世界と身の内に十全の御守護を賜り日々を恙なく結構にお連れ通り下さいまして、陽気ぐらしへとお導き下さいます御厚恩の程は、誠に有難く勿体なき限りでございます。私共は、親心にお抱え頂いて生きる喜びを味わわせて頂き、報恩感謝の心で信心に励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おぢばよりお許しを戴きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、十一月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、各地にて道の御用に勤しむ芦津の道の子達が参らせて頂きまして、たすけ心を尽くして共におうたを唱和し、尚も変わらぬ御守護にお縋りする状をも嬉しく御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下され、遍く世界によろづたすけの理をお垂れ下さいますよう御願い申し上げます。

さて、本部秋の大祭に於きまして真柱様より、教祖百四十年祭を目指して全教が心を一つに結んで成人の歩みを進める寄す処として、諭達第四号を御発布頂きました。私共をはじめ教会長、ようぼくは、諭達にお示し下さる教祖年祭を勤める意義を確と心に刻んで、三年千日を仕切って、ひながたを目標に教祖の教えを実践し、たすけ一条の歩みを活発に推し進める心を固く定めて、年祭活動に臨ませて頂く決心でございます。

何卒、至らぬところは幾重にもお仕込み下さいまして、教祖年祭の旬に、夫々の教会を足場に人材が育ち、たすけの教線が伸び広がって、陽気ぐらし世界実現へ向けて道の進展を御守護下さいますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

《11月月次祭　神殿講話》

形や行いに表して 3年間続けることが年祭活動

役員　岩切正教

心定めが第一

教祖の年祭の前には何が起こるか分からない、と聞かされて、これまでの年祭を勤めてきました。事実、コロナのふしを見せていただきました。少し遡（さかのぼ）れば、かんろだいのふしや真柱様がお倒れになるという大ふしをお見せいただいています。

こういったことから思案すると、今一度、それぞれの教会、ご家庭が、信仰の元一日を見直してしっかり道を歩め、とご意見くださっているように思うのです。この年祭が先々に、ふしから芽を吹く御守護を頂けるよう、努力を積み重ねていかなければならないと思います。

教祖年祭の声を聞くと、教会の中にもいろいろなことが起きてきて、急に慌ただしくなるような気が致します。私共の教会でも、ようぼく、信者さん家庭に身上や事情といったふしを見せていただいております。

神戸で50年間仕事をして、今年4月の退職を機に家族で九州に戻ってきたご家庭のご主人が、肺ガンになりました。「何か悪いことをしたのでしょうか。何が間違っていたのでしょうか」と尋ねられるので、

にち〳〵によふほくにてわていりする
どこがあしきとさらにをもうな
三号　131

とお仰せいただくように、「使う大事な道具は、手入れや修理、調整をしないと、使いものにならなくなりますから、お手入れがあるということは、目をかけてもらっているということです。神様が期待していると仰っているのですよ」と伝えると、非常に安心をされました。

ただ、「そのままこかす木」にならないよう、「月次祭にはおつとめ奉仕者として御用を勤めてください」とお願いすると、「すぐにとは約束できませんが、体力が回復したら、毎月勤めさせていただきます」と心定めをしてくださいました。

すると、手術後に、悪性腫瘍が小さな良性のポリープに変わっており、転移もないとのことでした。月次祭のおつとめを勤めるという心定めは、とても大切なことだと思った次第です。

それがあなたの年祭や

年祭活動は、どんな御守護を頂くか分からない、とても有り難い時旬です。年祭に伏せ込んだお陰で、身上の御守護を頂いたとか、年祭に尽くして運命を切り替えてもらったなど、いろいろなところで御守護の話を聞かせてもらいます。

これは教祖百十年祭の頃のことです。私共の教会のあるようぼくが、年祭活動を目前に控えた11月、当時会長だった私の父のもとに大教会を訪れました。大阪で建築の仕事をしている方ですが、「お金が回らなくて、どうすることもできない」という相談でした。その方の会社は、バブル崩壊のあおりを受けて資金繰りができず、多額の借金を抱えて倒産してしまいました。そこで、借金をして個人で会社を立ち上げましたが、まったく仕事がない最悪の状況でした。必死になって仕事を求めるのですが、なかなか見つからない。取ってきた仕事も、2～3日で終わるといった有様で、月のうち1週間から10日程度働ければ有り難いという状況が続きました。仕事がなくても職人の給料は払わなければなら

ない、資材置き場として借りている倉庫や会社である自宅の家賃の支払いはもちろんのこと、高校生と中学生の息子２人の養育費、病弱な奥さんの治療費と、毎月負担する金額は恐ろしくなるほど増えていきました。

どうにか生活を維持してきたのですが、どうにもならなくなって大教会にいた父を訪ねてきたのでした。毎月の赤字が50万円。借りられるだけお金も借りた。手を尽くしても満足な仕事が与わらない。支払いも返済も滞っているため、お金を貸してくれるところもない。家賃を払えなければ家を出て行かなければならないし、倉庫がなくなったら仕事にならず、借金も返せなくなる。どうしたらいいでしょうか、という相談だったのです。

父は、教会を預かることと、関西在住のようぼく、信者の丹精をするようにと伝えましたが、「お心はよく分かりますが、今は無理です。借金を返せなかったら、いろんな人に迷惑をかけてしまいます。神様に働いてもらう方法はないでしょうか」と尋ねられました。父は、「お金に困っているのだから、お金で伏せ込むしかない。尽くしたものが身につき、伏せ込んだものが身を守る。毎月10万円運ぶ心定めと、役員として教会長になったつもりで、来年１月から３年間、毎月島原に帰って月次祭を勤めなさい。それがあなたの年祭や」と言ったのです。

誠の心

「誠」という字は、「言う通りに成る」、あるいは、「言う通りに成す」と書きます。すなわち、言う通りにするという意味だと思いますが、ここで大事なことは、「誰の言う通りにするのか」ということです。誠の心とは、神様の言う通りにする、親の言う通りにする、ということだと私は思うのです。

神様の姿は見ることができませんし、声も聞くことはできません。しかし、その方は父親を早くに亡くしており、親代わりとなって世話をした私の父を、実の父親のように慕っていました。そして、父の言葉を神様の言葉と信じて通ることが自分の信仰である、としていたその方は、父の言葉を素直に聞いて、年祭活動にかけてみようと決断したのです。

親の言うことを聞かないことを親不孝と言いますが、その逆で、親の言うことを素直に聞くことが親孝行だと思うのです。その方は、いろんな不安を抱えながら、御守護を頂戴できると信じて、年祭活動が始まる年の１月から長崎の教会に毎月帰ることになったのです。

格安航空券がない時代でしたから、今の金額で言えば、毎月５～６万円くらい旅費がかかりました。また、15日から17日の２泊３日を月次祭のために費やす日程は、仕事に影響を与えることもしばしばあったと思います。現場に立ち会わなければならないときもあったでしょう。依頼主の希望に添えないこともあったと思うのです。そんな苦労の中を、３年間毎月教会に帰ってくださったのです。

あるとき、仕事の支払いをしてもらえなくて、長崎への旅費がないということがありました。すると高校生と中学生の息子さんが、「自分たちのことは自分らで何とかするから。それよりも、島原に手ぶらじゃ行けんやろ」と言って、アルバイトの給料を袋ごと渡してくれたそうです。家族が寝静まったあと、布団の中で涙ながらにお金を数えたことがあった、と仰っていました。そうやって誠真実を運んでくださいました。

不思議なことに、３年間毎月教会に足を運んで、月次祭を勤めることと、ならん中の真実、誠のお供えを尽くし運ぶようになってから、仕事がないと言っている世の中で、その方の会社には仕事の依頼があちこちから入るようになりました。そして、教祖百十年祭の１年前に阪神淡路大震災が起こり、仕事がますます忙しくなりました。年祭を迎える頃には、山のように膨らんでいた借金を全部返済でき

ました。さらには、社会人になった息子さんたちが旅費や御用の協力をしてくれるようになりました。

それ以降、また10年延長して、次の教祖百二十年祭まで計13年間、大阪から島原への帰参を続けてくださいましたが、この13年間は一日たりとも仕事が切れなかったそうです。

その方は直接教会へ足を運ぶ、家族はそれを支えるという、家族ぐるみの年祭活動でしたが、一つのことを決めて3年間実行するところに、借金まで抱えてくださり、不思議な御守護を頂くのだと思ったのです。

決めたことを続ける3年間

真柱様は秋季大祭で、

……年祭の意味や、どういう気持ちで勤めるのか分からない人もいるのであります。全教が心をそろえるためにも、知らない人は年祭の意味を知り、そして、をやの思いに沿わせてもらおうと積極的に歩む、そういう気持ちになってもらう。そのための材料として、この論達を利用してもらえればいいかと思います。

『みちのとも』

立教185年12月号　7頁

と仰せられました。材料にするというのは、よく思案をして実行することだと思いますが、その論達の中で「**ひながたの道より道が無いで**」とお示しいただいています。

私たちは、毎日いろいろな場面で、教祖にご安心いただける心の使い方や通り方、「教祖ならどう仰せになるだろうか」「こうしたら、教祖が褒めてくださるかもしれない」などと考えます。その基準になるのがひながたで、いつも心にかけて通ることが、ひながたを辿ることなのかもしれません。しかし、常に心にかけて通ることは難しいから、3年間一生懸命通ろう、というのが年祭の歩みです。

ひながたは、おたすけのお手本、つとめ一条のお手本、陽気ぐらしのお手本ですから、3年間ひながたを辿るといっても実に漠然とした話で、何をすればいいのか分からない、答えを出すのは難しい、という方もおられるでしょう。

だから、自分で考えて決めたことを、3年間続けるしかないと思うのです。3年と仕切って努力をする、その真心をお受け取りいただき、御守護を頂く。

教会であれば「こんな姿になりたい」、個人であれば「この事情を治めていただきたい、この身上を御守護いただきたい」と、必死にお願いする。そうすれば自ずと行いも変わってくると思うのです。必死にお願いして、神様に働いてもらえるように努力を重ねることが年祭活動の歩みだと思います。

「どんな御守護を頂くか分からない有り難い旬」と言われる所以（ゆえん）であります。

私は、この年祭活動で、地道にコツコツと、純粋に道を求める気持ちになって、どんなことがあっても神様がちゃんと見てくださっていると信じて努力を重ねていけば、教会も、それぞれのご家庭の未来も、大きく変わっていくと信じております。

例えば、絶対に不足を言わない。言われたことは素直にハイと言って受ける。月次祭は必ず勤めさせていただく。毎日十二下りのお願いづとめをする。日参をする。おつくしを倍にするという方法もあります。毎月おぢばがえりをする。別席者、修養科生をつくる。神様のお屋敷である教会のトイレ掃除をする。毎日にをいがけに出る。路傍講演に立つ。神名流しをして通る。おさづけを毎日必ず取り次ぐ。日々の理をお供えさせていただく。直接おたすけはできないけ

れど、人だすけの御用は何でも担わせてもらう。

自分の信じた通り方、自分ができることを形や行いに表して、３年間続けることが、私たちの年祭活動だと思う次第です。その努力の積み重ねが、教祖をより身近に感じることになると思うのです。

おぢばの理を戴いて

今年に入って、年祭活動のことで信者さんと話をする機会があり、「前の年祭の時はこうだった」と昔話をしていました。

教祖百十年祭の時は、今思えば意識が足りなかったと思いますが、青年会の御用があったので、毎月おぢばに2回帰っていました。

教祖百二十年祭の時は、青年会の経験があってか、困ったらおぢばに帰ろうと決めていました。年祭活動が始まる直前、心定めが完遂できないと悩んでいたときに、おぢばに帰ることを決めると、その日に大阪の信者さんから兄の身上の相談があり、翌日、大阪空港に着いた途端に、別のおたすけが3つ入って、その日のうちに心定めが完遂できました。その経験が「必死になって御用を担えば、おたすけが出てくる」という信仰信念にしてくださいました。それからは月の半ばにもおぢば帰参をするようになり、10年続けました。

教祖百三十年祭のときは、ご本部の神殿当番を務めるようになっていましたので、ひと月に2回おぢばに帰っていました。そのお陰か、離れかけていた2つの親戚一族、20数軒の家族が全部教会に戻ってきてくださいました。

◇　◇　◇

今年も、あとひと月あまりとなりました。年祭活動の心積もりをしていただき、一丸となって三年千日を通り切らせていただきたいと思います。この年祭活動が皆様にとりまして実りのあるもの、より良い運命の御守護を頂く旬であることを祈念して、神殿講話とさせていただきます。

（要旨）

十一月月次祭　祭典役割

祭主	大教会長	扉者	奥田眞治	扉者	山本義範
指図方	井筒文夫	賛者	中村俊和	賛者	瀧本一太郎
献饌長	瀧本眞二郎	伝供	在籍者一同		

	てをどり	地方	笛	ちゃんぽん	拍子木	太鼓	すりがね	小鼓	琴	三味線	胡弓
座りづとめ	大教会長 奥田正徳 今川政治 会長夫人 前会長夫人 浜田たつゑ	湯川正圀 川畑澄博 岩切正義	瀧本眞二郎	守田清一	井筒敏成	山田道弘	岡島秀男	加世田洋	中村美津代	岡島きよの	榎理恵子
前半	竹内義忠 西本義之 木村真次 吉田幸子 梶川りよ子 梶川文子	吉田裕和 梶川和隆 浜田宣郎	樋川泰士	河端芳雄	瀧本庄司	石川健郎	梶川芳男	葭内浩	望月恵美	河合遊喜恵	松森明美
後半	今川聖一 榎康紀 望月慶太 山本広子 中村寿々代 奥田千晶	河合善洋 新居里実 梶川芳征	花岡忠和	川畑正博	奥田正儀	岡本久昭	吉田裕樹	村田光伸	山田秀子	瀧本美奈	花岡由紀子

喜びの奉告祭

五代会長就任奉告祭

大清分教会

大清分教会（大冠部属・大阪府高槻市）は、昨年11月6日、大教会長、井筒ふみ子前会長夫人をお迎えして、段野渉五代会長就任奉告祭を執り行った。随行は竹内義忠役員。

午前11時、段野会長が祭文を奏上。続いて挨拶に立たれた大教会長は、「当たり前ということがどれほど有り難いことかを再認識して、信者さんや周囲の方に対して、教会が陽気ぐらしの手本になるよう、日々勇んで勤めていただきたい」と、新会長に対する期待を述べた。

おつとめを勤めた後、段野会長は、「来年より始まる年祭活動を勇んで勤めさせていただきます」と、力強く決意を述べた。

その後、会食をして和やかな時間を過ごした。

参拝者は34名であった。

四代会長就任奉告祭

上郡分教会

上郡分教会（吉野川部属・徳島県三好市）は、昨年11月13日、大教会長をお迎えして、大西直喜四代会長就任奉告祭を執り行った。

上郡の道は、明治27年、大西松蔵がこの道にお引き寄せいただき、真実の御教えに触れた感激から、にをいがけ・おたすけに奔走し、上郡出張所初代所長として理のお許しを戴いたことに始まる。

当日は、大西会長の祭文奏上の後、大教会長が挨拶。「陽気ぐらしとは、互い立て合いたすけあうこと。教会にはその陽気ぐらしの雰囲気が漂っていることが大切。初めて参拝に来た人が、『また行ってみたい』と思うような教会にしていただきたい」と望まれた。

陽気におつとめを勤めた後、大西会長が挨拶。「歴代会長から受け継いだ光をさらに輝かせ、陽気ぐらしへ前進できるよう、精いっぱいつとめます」と決意を述べ、続いて前会長夫妻に花束が贈られた。

参拝者は60名であった。

青年会常任委員研修会

青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は昨年11月26日、詰所で常任委員研修会を開催。

「教祖百四十年祭へ向けての年祭活動に、自分は何ができるのか」をテーマに、昨年8月に新たに任命された青年会常任委員15名が参加した。

午後5時30分より、井筒委員長が常任委員の役目、総会の意義などを説明後、青年会長様が仰った「問いと対話」について述べ、今後の会活動に取り入れていきたいと熱く語った。

論達を拝読後、グループに分かれ「今の自分にできる年祭活動とは何か」「芦津分会ができる年祭活動とは何か」をテーマに対話を行った。

参加者からは「年祭活動が初めてで、何をしたらいいか分からなかったが、いろいろな方の意見を聞いて、もっと教祖のことを知る、教理を知ることが大切だと気付いた」との声が聞かれた。

立教185年 婦人会芦津支部総会を開催

昨年11月24日、婦人会芦津支部（井筒年子支部長）は、大教会で立教185年婦人会芦津支部総会を開催。直属委員部長を中心に108名が参集した。

午前10時より、おつとめを3交代で勤め、参拝場では総立ちでてをどりを勤めた。

その後、式典に移り、瀧本美奈委員が開式の辞を述べ、松森明美委員が会務報告を行った。そして婦人会本部祝辞を井筒支部長が代読し、続いて挨拶。「10月26日のご本部秋季大祭で真柱様よりご発布いただいた『諭達第四号』を、一人ひとり重き理としてしっかり心に受け止め、心を揃えて実動する旬が目前に控えています。諭達の中にある教祖のお言葉から、そこにこもる教祖の親心を深く思案し、三年千日の心定めをさせていただきたい」「私たち一人ひとりが個々のおたすけと、それぞれ持ち場立場の上から担う御用をしっかりつとめ、三年千日を通して仕切った信仰実践に勇んでつとめましょう」と奮起を促された。

木村理恵委員が誓いの言葉を述べた後、日樫雅代さん（鎮名委員部長）、山下明美さん（芦山都前委員部長）が感話。自身の経験を振り返り、年祭活動には自分にできるおたすけに励みたい、と意気込みを話した。

最後に婦人会会歌を斉唱し、山本広子委員が閉式の辞を述べた。

おつとめは、全員が総立ちでてをどりを勤めた

女子青年大会に合わせ「女子青年のつどい」を開催

昨年11月27日、本部中庭で「第30回女子青年大会」が開催された。芦津支部女子青年（北村はぎ乃委員長）は、それに合わせ、前日26日午後より「芦津支部女子青年のつどい」を開催。女子青年91名を含む134名がおぢばに帰り集った。

26日は午後2時30分より本部神殿で参拝。その後、本部北庭周辺で落ち葉掃きひのきしんを行った。

詰所に戻り、大広間で井筒年子支部長からの挨拶を竹内淳子婦人会委員が代読。「おぢばに帰ってこられるのは親神様、教祖が皆さんに大きな親心をかけてくださっているお陰。どうすれば教祖に御安心いただき、お喜びいただける成人ができるかを考えてもらいたい」と女子青年に対する期待を述べた。続いて女子青年常任委員に辞令交付があり、北村委員長が「大勢の皆さんと一緒に、楽しく女子青年活動を行いたいと思います」と就任の挨拶をした。

レクリエーションの後、夕食。婦人会が手作りで弁当とサイドメニューを準備し、食事中もイントロクイズなどで盛り上がった。

翌27日は午前10時より本部女子青年大会に参加。真柱様からのメッセージを拝聴した。

参加者からは、「真柱様のメッセージを聞かせていただいて、自分もにをいがけをしたいと思う」「何でもハイと素直に言えるようになりたい」との感想が聞かれた。

全国各地から91名の女子青年が帰り集った

全教会一斉巡教

「諭達第四号」のご発布を受け、芦津大教会は1月～2月に直属教会へ、3月～5月に部内教会への巡教を行い、全てのようぼくに諭達の趣旨徹底と実動を促していく。

直属教会

大教会長＝東津・日方・門司・甲邊・芦明徳・眞明彰化
井筒年子＝和鎮・芦東
井筒文夫＝島原・尼崎・真伯
湯川正圀＝稗島・紀周
瀧本眞二郎＝本津・津和
岡島秀男＝日高・本氣
守田清一＝靱・天保山
岩切正教＝明道・兵庫眞洲
川畑澄博＝大島・豊野
奥田眞治＝芦浪・大冠・神滝本
竹内義忠＝當別・四ツ山
山本義範＝青木・沖縄・島下
山田道弘＝吉野川・姶良・本明勇
加世田　洋＝芦華・芦ノ郷・芦明照
岩切正義＝直轄・入江・天津
瀧本庄司＝勝明・神の島
梶川和隆＝吉池・西ノ庄・紀南・青港・大清
立花善三＝昭心・芦日眞・千船・津浪・稲津
西本義之＝苅田町・鶴洋・芦門・矢部川・芦眞勇
葭内　浩＝有田港・冷水・畦浜・芦沖・琉宮
浜田宣郎＝渭山・昭大・吹上濱・東淀川・毛見
木村真次＝島原港・島百合・本京櫻・浪華浦・南向
中村俊和＝明慈・海南・福・豊崎・芦姫
石川健郎＝東鎮・東天童・立治・紀志・眞一
樋川泰士＝津雲・東大木・丸芳・笠松・鷺洲
奥田正儀＝真大富・大崎原・大棚・大屋仁・輝浪
河合善洋＝真大奄・理風・大仲町・大眞永・大龍郷
花岡忠和＝日台・徳修・紀野本・東布施・津勝
今川聖一＝岩野邊・小松ケ原・津泉・晝間・井内谷
川畑正博＝山城谷・芦名・徳上・御谷
梶川和人＝善徳・祖谷川・東祖谷・福田荘・津阪部
榎　理恵子＝東向・鎮恵・芦島鶴
望月恵美＝四ツ海・上有明・甲山
宗我邦代＝芦明眞・神甲・白野江
岩切孝子＝薩州・順世・神輝誠

部内教会

大教会長＝吹櫻・芦玉・芦山都・本伊丹・鳥栖・照南・畦川
井筒年子＝紀内・明高・春日出町・吹田
井筒文夫＝美和名・芦広・大朝・芦大熊・奄美笠
湯川正圀＝津阪・日名南・島新・紀船
瀧本眞二郎＝今津原・日幡・和草・西浜
守田清一＝加島港・海部川・周宝・芦船
岩切正教＝脇西・東脇町・高清・芦美屋
川畑澄博＝脇町・徳三・三好・上郡
奥田眞治＝恵庭・東倶・北勝・芦勝・太美
竹内義忠＝鎮名・玉成・和阪・東迎
山本義範＝大正町・島大・島浜・東大屋
山田道弘＝大玉・芦種・芦出水・南國
加世田　洋＝富島・二名・笠戸・大関門
岩切正義＝有家・加津佐・末宝・島長
瀧本庄司＝白地・脇東・上池・北地
吉田裕和＝泉砂川・大笠利・名瀬港・芦金久・芦南

教務部報

教養掛（9月～11月）

教養掛主任
竹内　義忠

教養掛
原田　晃雄・久米　義彦
八木　幹雄・山田　大幸
望月　恵美・石川　石美
榮　郁恵

教人登録
高井　貞夫（大関門）
山下　親助（芦山都）
山下あかね（芦山都）
立教185年11月8日

井筒さちえ（直　轄）
瀬戸山眞美（照　南）
立教185年11月28日

教人資格講習会第126回修了
八木はるか（東大屋）
瀬戸山眞美（照　南）
立教185年11月10日

修養科第975期修了
山田　満（苅田町）
加世田もとよ（大　島）
福崎　久男（奄美笠）
福崎　道代（奄美笠）
立教185年11月27日

おさづけの理拝戴《10月》
山下　桃花（芦山都）
浜田　扶久（直　轄）
西本ひかり（尼　崎）
吉永　竜也（芦明徳）
高瀬　一眞（苅田町）
〈拝戴日順　5名〉

初席《10月》
〈1名〉芦大熊、琉宮
〈順序運びより　2名〉

月例統計（自令和4年1月1日～至令和4年10月31日）

名称（ ）内教会数 ＼ 項目	初席	のお理さ拝づ戴け	修養科修了	教人
大教会（1）	10	11		
靱（13）	2	1		
東津（23）	2	2	1	
吉野川（29）	2	2	2	1
島原（16）	6	1	2	
日方（15）	3			1
稗島（7）	2	1		2
本津（2）				1
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）		1		
門司（6）	1	2		
當別（6）	1			
大島（26）	4	2	2	2
沖縄（3）	1	1	3	
尼崎（2）	1	1		
四ツ山（5）	4	1		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）		1	1	
青木（1）				
芦浪（1）		1		
甲邊（1）	1			
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）	1			
紀周（3）	1	3	1	
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）		2		
芦ノ郷（2）	1			
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	2			
神滝本（1）				
芦明徳（1）	1	1		
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	46	34	12	7

学生生徒修養会

大学の部　3/4（土）～ 3/8（水）
受講費：10,000 円　申込締切：2月 15 日

高校卒業生コース　3/10（金）～ 3/12（日）
受講費：5,000 円　申込締切：1 月 31 日

○申込方法：受講願書（天理教学生会の HP からダウンロードできます）と返信用封筒（保護者氏名、住所、郵便番号を記入、84 円切手を貼付）、幣帛料（1,000 円）を、学生担当委員会（詰所　木村・奥田）までご提出ください。

春の学生おぢばがえり

3/28（火）
午前 10 時開会
於：本部中庭

○内容：真柱様メッセージ（代読）、実行委員長挨拶、決意表明、『希望の花』斉唱ほか
○式典終了後、詰所で直属アワーを開催します
○前日に大教会からの徒歩団参を企画しています